≪座談会≫

「新島研究をめぐって」

北垣宗治（大学文学部教授）
河野仁昭（本部社史資料室長）
竹中正夫（大学神学部教授）
――司　会――
井上勝也（大学文学部教授）

出席者（ABC順）

井上　来年、一九九〇年の一月がまいりますと、新島先生が亡くなられて百年を迎え、いろいろな行事が計画されておりますが、本日は「新島研究をめぐって」と題して、日ごろ、新島に強い関心をお持ちのお三人の先生――神学部の竹中正夫先生、文学部の北垣宗治先生、社史資料室長の河野仁昭先生にお話をいただくことになりました。

『新島襄全集』が一九八三年に第一巻が出まして、先月第四巻が出ました。全十巻のうち、残すところあと三巻――七、八、九巻となったわけでございますが、このあと三巻の刊行が待ち遠しいところでございます。新島研究は、新島がなくなりました一八九〇年、ミス・マッキーンの短い新島の伝記をはじめ、デイヴィスの『新島襄の生涯』が出ております。その翌年には、ハーディーの息子のアーサー・シャーバン・ハーディーが『新島襄の生涯と手紙』を出しております。その後久しく、こういったものが原資料になって新島の研究が、あるいは新島を追慕するようなことが、実際に習った、学んだ人たちを含めてなされてまいりました。そういう時代から、森中章光先生が、とりわけこの第二次大戦中、お独

りで貴重な文献をお集めになり、あるいは写されたことが、やはり新島研究の材料提供という意味で大きな役割を果たしたのではないかと思います。本日はだいたい新島研究の過去、現在、未来というような大まかな分け方の中で自由にご発言をいただきながら、いままでの新島研究はどうであったのか、そして今後はどうあるべきかについてご発言をお願いしたいと思っております。

それでは、最初に竹中先生から、新島研究について何なりと先生のお考えをお話下さい。口火を切っていただきますと、あと話がしやすいのではないかと思っておりますが、いかがでしょうか。

原点としてのデイヴィスとハーディーの伝記

竹中　一人の人物が多くの人に感動を及ぼして、同志社とい学校ができたわけですが、新島という人の場合、亡くなってすぐ彼の伝記が出、それがデイヴィスのものと、それとアーサー・S・ハーディーのものとこの二つは亡くなって約一年のうちに出た。ぼくは新島研究の基本的なラインがそこにいままでもあったし、そこにまたいまも帰っていくべきものがあると思います。私は最近の研究では、北垣先生が丹念にデイヴィスのものを訳して注をつけ、デイヴィスの誤りまでだいぶ正して、再現して下さった意味はきわめて大きいと思います。

それからアーサー・S・ハーディーの*Life and Letters*のほうも、あれは『全集』の第十巻に北垣先生によって訳出されました。ぼくはこの夏ずっとあれをもう一度丹念に読みまして、感銘しました。ケーリ先生の編集になる英文書簡集においても、指摘されていますが、ハーディーが*Life and Letters*に用いた手紙のうち、百二十ほどは今日では発見されているということも指摘されています。これまではケーリ先生をはじめ、三十年の研究、探索があっても出てこなかったのですから、そうそう出てくるものではないと思いますが、つきないなぞのようなものです。それと同時に気のついたことは丹念な注のついていることです。ぼくは注をずっと勘定してみたら五百ぐらいあるのです。あれだけでも大変な仕事だと思います。*Life and Letters*を現代によみがえらせて注釈し解明し、また現代人が見ても非常にわかりやすい日本語で再現してくださった。私はそういう原点にあったものを我々は見逃していたわけじゃないのですけど、もう一度現代の研究の視点からそれを再活生化している。再評価し、あるいはそれを現代の人たちにわかりやすく提示していることは、ぼくは大きな特色だと思うのですね。

その意味で河野さんの社史を中心にしてなされた、『創設期の同志社』でしたか、あれはものすごく興味深いお仕事をされたと思います。あれをもともとしたのは、女子教育をやった……。

河野　松浦政泰ですね。

竹中　松浦政泰でしたね。同志社の女子部から日本女子大学に行った人ですね。あの人のあれは、『同志社ローマンス』からでたのですね、基礎資料ですか。

河野　はい、基礎になっている。

竹中　ぼくは『同志社ローマンス』をこの夏また見たのです。そうすると、あれはむしろテーマ別に書いてありますね。

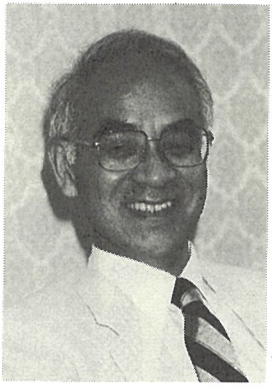
河野　整理しすぎているという感じもしますね。

竹中　そういう点もあるでしょうね。ああ

いうふうにどこのだれが書いたということを『同志社ローマンス』が書いているけど、原資料そのものを今度は復刻して、出されたので、これはたいへん資料価値が大きい。そこから今度は新島に影響を受けた人たちが実証的なあかしをしていますから、新島像はもう一ぺん再評価できるのじゃないかと思いますね。そういういままであったものを今度はいまの研究の時点から再評価し、再発掘し、あるいは現代人にわかりやすく出していったというのは、これはこれからの研究に非常に大きな力になる素材だというふうに思いますね。

河野　竹中先生は、よく使うていただいていますから……。

竹中　新島さんという人はよく思想家ではない、教育者であると。あるいは学者ではないといわれます。彼は人格的感化を及ぼした人であると。非常にカリスマ的な威光を持った人だけども、学問的な体系家ではないし、資料も少なく研究はしにくいという人がいます。しかし、組織的な学者ではなかったにしろ、先ほどからお話があった『新島襄全集』をはじめ、復刻され現代に再提供された資料を見ますと、新島の研究について資料がないとはそう簡単には言えないとぼくは思います。



北垣宗治氏

井上　ありがとうございました。新島研究の基本資料であるデイヴィスの『新島襄の生涯』、それからアーサー・S・ハーディーの『新島襄の生涯と手紙』を翻訳なさり、また、ここ五年ばかり毎年ハーヴァード大学で、アメリカにおける新島の資料をお調べになっています北垣先生からご発言いただきたいと思いますが。

ミス・マッキーンと根岸橘三郎の伝記

北垣　竹中先生がおっしゃいましたように、新島襄に関して非常におもしろい点は、死後一年のうちに二冊の英文の伝記が出たことです。さらにアメリカでもう一冊、ミス・マッキーンの*Story of Neesima*という小冊子がボストンで出ております。これはもうほとんど手に入らない本で、ハーヴァード大学図書館でも貴重本扱いしておりますが、同志社には何冊かあるようです。『新島研究』誌でも、加藤先生のご努力で三五、三六号に全部内容が翻刻されております。このミス・マッキーンは、一八六五年、六年、七年ごろ新島がフィリップス・アカデミーの生徒だった時分に日曜学校で新島を教えた先生でした。そしてアボット・アカデミーというアンドーヴァーの女子高等学校の先生であったことがわかっておりまして、この人の書いたものが実は新島の伝記的スケッチとしてはいちばん古いわけです。その次がデイヴィス、一八九〇年、そしてその次がハーディー、一八九一年ということになるわけで、三人ともアメリカ人であるということ、そしてそのアメリカ人をあれだけ惹きつけたということは、新島の人間としての誠実な態度が非常に彼らに訴えたということも明らかだと思います。デイヴィスなんかはまさにそうです。

　したがって、日本人側の新島研究はそれに刺激を受けつつかなり遅れてスタートしてい

河野仁昭氏

るように思います。私は一ぺん暇ができたら新島の伝記を出版された順に全部比較対照してみたいという希望を持っておりますが、いまそれを果たすことができません。例えばよく問題になります根岸橘三郎による『新島襄』というのがありまして、これは最もおもしろい伝記の一つではないかと思うのですね。根岸さんという人は安中の出身であり、独特の資料の集め方をした人でありまして、いろいろ集めているくせに、でき上ってしまったものが新島先生のイメージを歪めるということで柏木義円先生、そして湯浅治郎さんといった大長老からめちゃくちゃに叱られたという、そういうエピソードの持ち主です。

ところが、根岸の伝記にしか書いていないようなことがいっぱいあるわけです。それに、こんなはずがないというようなことも出てきます。ですから、根岸の伝記は注意深く読まなければならないのですけど、もう一つおもしろいことは、最後に、根岸がどうなったかということです。根岸という人のライフをたどっている人はあんまりいないのじゃないかと思います。どうも最後はアメリカで亡くなったようです。なのに、根岸という人は英語ができないのですね。英語ができない証拠は、あの中に、アルフィーアス・ホームズ・ハーディーの奥さんキャロライン・ハーディーから根岸あての手紙が引用されているのですが、いっぱい綴りのまちがいがあるのです。根岸さんが英語がちゃんとできていたらきちんと校正したはずです。それにしても、その手紙自体は非常におもしろいもので、つまり、根岸はハーディーの嫁、すなわち長男の奥さんあてに自分で手紙を書いて、「おたくには新島先生に関する資料は残っていませんか」ということをちゃんと問い合わしたわけです。それに対する返事が載っています。結局、どういう返事だったかというと、「アメリカン・ボードのバートン主事に聞かれるのがよろしかろう」ということと、もう一つは*Life and Letters of Joseph Hardy Neesima*をぽんと一冊送ってきたのですよ。もしそれが読めたら、それを大いに利用して、もう一ぺん自分で伝記を書き直すことができたはずなのに、それをほとんどやっていないのです。そのことは根岸に関して非常におもしろい事実だと思っています。

あとは、魚木忠一先生の仕事とか岡本清一先生、あるいは加藤延雄先生の短い、しかしよくできている仕事、そして和田先生のがいちばんよくできていると私は思っていますけれども、もちろん森中先生のオーソドックスな伝記があるわけでありまして、私たちはみんなそれらに負うているのですが、こうやって『新島全集』がほとんど完結に近づいてまいりますと、改めて今度は、この『全集』を基礎資料にした上で伝記が書かれる時代に一九九〇年代は突入するのであるというふうに痛感しております。その第一弾として、新島襄の詳年譜を松井全さんが中心になって作ってくださいました。原稿を全部読ませていただきましたが、それはもう徹底したものです。驚くべきものです。ことに一八八九年、新島の死ぬ一年前の年などは、ほとんど毎日の記述が入っていますよ。あれは本当に驚きます

ね。

井上　ありがとうございました。それでは先ほどお話しに出ておりました『創設期の同志社』、これは非常におもしろい、当時の同志社の学生たちが新島に直接習っての生の体験を語っている書物でございますが、こういったものや、あるいは『同志社百年史』、これは通史編と資料編に分かれております。それからまた、今回の『新島全集』に直接かかわってこられ、また同志社の社史、新島関係資料を整理し保管していただいております河野先生のほうからいかがでございましょうか。

新島研究の方向と新島イメージはデイヴィスの伝記で…

河野　もうお二人の先生のお話で、要点はだいたい尽きているように思いますけれども、お二人の先生がご指摘なさったように、私もいままでの新島研究、主として伝記研究ですが、その基本的な方向を打ち出したのはデイヴィスが、新島の亡くなった年の十一月に出した『新島伝』だと思うのですね。その訳本は翌年一月に出ます。これもすでにご指摘がありましたが、その年にハーディーの息子のA・S・ハーディーが*Life and Letters*を出しますけれども、このほうは、一九八五年に初めて北垣先生が訳されて、『新島全集』の第十巻として出版された。それまでは、これは日本語で読めるようになっていなかったのです。ただ、その*Life and Letters*におさめられている新島が書いた文章の一部が*My Younger Days*という表題ですけれども、この題のつけ方はおもしろいと思うので、大正五年ころにはパンフレットになっています。これは、当初から英語の副読本なんかで中学校が使うのですね。抄出した文章が一人歩きをしたわけです。これが日本語に訳されるのは第二次大戦後じゃないかと思いますけども、とにかく*My Younger Days*だけは読むことができるようになっておりましたけれども、全体は読むことはできなかった。だから私は影響が大きかったのはハーディーの仕事よりは、デイヴィスがつくった伝記だったと思うわけですね。それも原本ではなくて、原本は改訂増補されますが、そう多くの人は読まない。むしろ、翻訳のほうが読まれまして、これが明治三十六年の七月が最初だと思いますけども、同志社の普通学校を卒業して京都大学の教授をやっていた山本美越乃という人が増補改訳をします。これはもうずっと版を重ねて、異版本もかなりありますけれども、どれくらい読まれたかちょっと見当がつかないくらいです。北垣先生が昭和五十年の十一月に、同志社校友会の依頼でこれを現代語訳とでもいうべきものにするまでは、この山本の訳が読まれてきたわけなんですね。私はこの伝記が新島に関心を持つ人たちに与えた影響というのは、これはもう絶大なものだと思うのです。

デイヴィスという人は、これは『創設期の同志社』でもよく話題になっておりますが、熱の人、あるいは情の人、あるいは軍人タイプの人、そういう性格を持っていた熱烈な信仰者であるし、それから新島と同志社をつくるために苦楽を分け合った人であるわけです

竹中正夫氏

井上勝也氏

ね。恐らくだれかから依頼をされてでしょうか、新島が亡くなった直後から伝記の筆をとった。だから新島追悼のおもいが非常に濃厚であると同時に、そういうデイヴィスの性格がこの伝記には相当あらわに出ている。伝記の主題が一つはキリスト者としての新島、それからキリスト教未開の国というか、非常に文明開化が遅れているこの日本の荒れ地でキリスト教主義の英学校をつくり、かつ維持していく上での苦心、といったところにあるわけですが、これはデイヴィスその人の信仰であり苦心であるので、そこに大きな特徴があると思うのですね。それ以外に、新島の人間的な悩みとか、新島の趣味とか、家庭生活とか、さまざまな側面が人間ですから新島にもあるはずなのですけども、そういう点は、まあ時間的にもそれは書けなかったと思いますけれども、このデイヴィスの伝記にはほとんど触れられていない。いわば殉教者とでもいうべき新島像をデイヴィスは書いている。私はその本が日本語に訳されて、ずっと読み継がれてきたことの意味は大きいし、それだけにこの伝記が新島研究の方向を決定したというふうに見ていいんじゃないかと考えているわけです。もしD・W・ラーネッドが新島伝を書いていたら、そのイメージはおそらくちがっていたでしょう。彼の『回想録』を読んでそう思うのです。

いま北垣先生から、根岸の新島襄伝のことが言われましたけれども、確かにあれはおっしゃるように、間違いとか、描かれたエピソードが問題だとか言われる本なのです。でも、何冊か新島を主題にした単行本があるのですけれども、これは少なくとも第二次大戦以前に出された新島に関する単行本の中で、デイヴィスの描いた新島イメージから最もかけ離れているユニークなだけにデイヴィスがつくったイメージから逸脱する面がある。そこのところも私は柏木らにはカチンとくるものがあったのではないかという気がするわけです。とにかく、新島研究の方向と新島イメージは、デイヴィスによる伝記によって相当ていど決められているでしょう。

それから、もう一つですが、北垣先生からアメリカ人によってまず新島研究は開始されたといわれましたが、確かにそうなんですけれども、しかし、たとえば徳富蘇峰は明治二十一年三月「福沢諭吉君と新島襄君」という論文を『国民之友』に書いています。日本ではこれが最も早い新島研究でしょう。ついで新島が亡くなった直後、浮田和民は「同志社の発起者、設立者及び創業者」というのを、「同志社文学会雑誌」の三十二号、明治二十三年四月号に載せています。これは追悼演説の草稿ですが、すごく冷静に客観的に新島を語っています。

浮田は、「そもそも同志社を知らずして、みだりに先生をほめ、または先生を退ける者は、これ皆真に先生を知るの人にあらざるなり」といって、同志社を、創業以前が第一、発起の時代、第二は設立の時代、第三は創業の時代、第四は成業の時代と四期に区分しまして、確かに第一の発起の時代には新島しかいなかった、第二の設立の時代になってあらわれたのが山本覚馬であり、そして宣教師のデイヴ

ィスであった。この二人が新島を援助して、一緒になってやったから創業ができたので、これは新島の手柄のみに帰することはできないのだと。それから第三の創業の時代で何を挙げるかというと、L・L・ジェーンズとその門下生たちです。

そして、新島は結局どういう人かというと、浮田は二点を挙げるのです。一つは黙徳の人である。人にいろんな秘密、泣き言、どんなことを言われても、それは絶対に漏らさないという意味での黙徳。それから涙徳です。新島は理路整然と演説をやって、人を動かすというタイプではなかった。いわゆる声涙ともにくだる演説をやって、その涙でもって聴衆の感動をよぶ人であったと言うわけですね。デイヴィスがつくったイメージとは違うのです。ラーネッドも「回想録」の中で、「ヨルダン川に三つの源があると言われているが、同志社にも三つの創立者があると言ってよい。すなわち新島先生とアメリカの友人と熊本バンドとである」という位置づけをしていますね。

祈りの人新島と日本人・人間新島

竹中　おもしろいお話です。新島が死んで、新島先生の著作集刊行会とか伝記編集委員会というのができなかった。それらをつくるまでもなく、自発的に新島の伝記を書いていったというところに、彼の生きざまの中に人々を動かしていくものがすでにあったと思いますね。いまのお話しの点はそういう点でいろんなアメリカの人々、熊本バンドのメンバーである浮田の話などあったのですが、もう一人はこれは熊本の人ですが、徳富猪一郎の新島に対する私は畏敬の念を忘れてはならないと思います。彼は新島の人格に感動した弟子の一人で、同志社を中退した人ですが、同志社とともに歴史の中で徳富が新島を思い、新島に在学中に果たすことのできなかった思いを新島の死後もずっと死ぬまで尽したということは、同志社の新島研究の一つの流れであったと思います。そしてそれを具体的に筆にして編集されたのが森中さんだと思いますね。そのいちばんいい例は一九五五年同志社の創立八十年のとき、同志社はどういう形で八十周年をやったかというと、徳富を招いて、講演をしてもらい、社員全体で中学の体育館で社員の全交会を開きましたことを覚えてますけれども、そのときに同志社の出版物としては二つ出していますね。一つは、徳富蘇峰が新島襄について書いたものを森中先生がまとめて『新島襄先生』を刊行し、もう一つは、『同志社―その八十年の歩み』という写真集を出されました。あれを読んでみますと編集者の苦労が推察されます。八十周年の時期は迫ってくる。しかし、えらい先生方は委員には名前は出しているけれども、あまり動いてはくれない。だから、編集部の人たちが一生懸命苦労して間に合わしておつくりになったという感じがする写真集ですね。もう一つは、同志社が頼んで徳富猪一郎に『新島襄先生』という本を出してもらったわけです。あれはたしか三百九十ページぐらいの本ですけれども蘇峰の書きおろしではなく、森中先生が徳富さんが書いたものを集めて編集されたものですね。ですから、相当重複があります。しかし、読んでみますと、ものすごくリズムがあるのです。これでもか、これでもかというぐらい徳富の新島を思う心があれにはよく出

ています。八十周年のお祭りというのは同志社の戦後のいちばん大きな最初のお祭りでしょう。そのときに徳富に新島襄先生の伝記を書いてもらったというのは、その新島精神をずっと、ある点では持続させてきた一つの流れはぼくは徳富だと思いますよ。

デイヴィスは先ほどおっしゃったように、新島を祈りの人、伝道者新島、熱烈なる日本人キリスト者というイメージで書いてますね。ところが、徳富は「先生は正真正銘の人間であり、しかして正真正銘の日本人である」といっています。だから、日本人・人間新島というところに彼は中心点を置いて書いている、そういう感じがします。

井上　新島が亡くなる前からデイヴィスは新島の伝記を書こうと準備していたのではないかと思うほどに早く、かついろんな資料を使って書いておりますし、それからA・S・ハーディーも、ダートマス大学の教授時代にテニアで休暇がとれたのでしょうね。

A・S・ハーディーの来日

北垣　たぶんとれたのだと思います。

井上　あの時代に日本にまで来て資料を集めて、それをだれに翻訳してもらったのか、うまく使ってあの早い機会に伝記を出しているというのは、やっぱり新島という人はそれだけカリスマ性とともに、人を動かす大きな魅力をもった人だということをつくづく思いますね。

竹中　北垣先生、いまおっしゃったアーサーS・ハーディーが来たのは一八九〇年の秋。

北垣　九〇年の秋だと思います。

竹中　同志社側では彼が来てどうしたということは記録にあるのですかね。

河野　ないですね。

竹中　あんまりないですか。

北垣　ぼくはいままでそういったことに気をつけてきたのですけれども、いままで調べた限りではないですね。むしろ、A・S・ハーディーには、*Things Remembered* というタイトルだったと思いますが、そういうエッセイ集をホートン・ミフリンから出しております。これは彼の思い出の記なんです。彼は外交官でもありましたから、ペルシャがどうであったとかいうようなことも書いています。そのうち一部に一八九〇年の日本訪問、その目的は新島の伝記の材料集めですが、そのためにやってきたときに、東京でどういう人に会ったかというようなことも書いているのですよ。東京で犯した失敗、例えば昔、明治時代にはやった銃を何と言いましたっけ。三八銃じゃない、何銃……。

河野　村田銃？。

北垣　その村田銃の発明者である村田経芳に招待されて、ハーディーはウェストポイントの士官学校出身ですから、東京でごちそうになっているのですよ。そのときにたまたまはいていた靴下に穴があいておりまして、その穴をどうやって隠そうかと(笑)、それが恥ずかしかったというようなことを書いています。ところが、京都に行ってどうのこうのということは一切出てこないのです。その辺はぼく、きっとデイヴィスに会っていると思うのですね。

竹中　それはね。恐らく二人は会ったと思うのですよ。

北垣　それからラーネッドとか、その他の宣教師に会っているに違いない。同志社にいるアメリカ人に会っているに違いないわけです。その辺のことは出てこない。ということ

は、どうも必ずしも同志社の宣教師たちの考えと、A・S・ハーディーの考えとは一致しなかったのじゃないかという、これはぼくの勝手な憶測ですけれども。もしそうでなくて、非常にうまくいったのだったら、もっと京都のことをその本の中に書いていても何の不思議もないと思います。ですから、デイヴィスをも含めて、当時の宣教師たちとA・S・ハーディーとは、そりが合わなかったのじゃないかという感じがいたします。

竹中　そういうことが、ある点では百二十通という手紙の貴重な資料が、本来から言えば、同志社に当然来るか、また公の場所だったら、ハーヴァードのホートン・ライブラリーのアメリカン・ボードのコレクションの中に当然入っているわけだと思うのです。しかし、やっぱりハーディー家の人たちはそれを自分たちのものとして渡さなかった。それがいま捜してもなかなか出てこないということに関連していると思います。

河野　*Life and Letters*に新島の手紙がすごくたくさん入っているけれども、ほとんど完全な形では入っていないのですよね。

A・S・ハーディーの編集方針

北垣　ええ、完全に近いと思われる手紙も幾つかありますけれど、A・S・ハーディーの編集方針は平気で以下略式にチョン切ったり、前のところでチョン切ったりして使っておりますね。

河野　ハーディーの手が入っているというか、朱が入っているだろうと思われますね。

北垣　ぼくは英語の教師としてその点非常に興味があって、どのくらい入っているかということを多少は研究してみました。実は新島の英文として同志社に残っているものと、それをハーディーが引用している例があるのです。それらを比べてみますと、どの程度訂正したかということがわかります。同じものをまたデイヴィスが引用する場合、デイヴィスもまたいくらか訂正するわけですね。その辺のことは非常におもしろいです。

竹中　そうですね。『新島全集』の第十巻のところで例として注に長く比較しておられましたね。小さい彼の読み込みの間違いで蛙(*frog*)と旗(flag)のとりまちがえから、「井の中の蛙大海を知らず」が「井の中の旗は大海を知らず」となっている点もありました。しかし、あの人はぼくは編集者としてたいへんな技量を持っていると思いましたね。北垣先生の解説を見てぼくは初めてわかったのだけれども、あの人自体が小説家ですね。ですからそういう点、彼自身外交官であったり、ダートマス大学の先生であったりしたわけでしょうけども、しかし小説を書いている。そういう点の関心というのがぼくはあれに開花しているように思います。

河野　手を加えたというか、あんまり汚くしすぎたので公的にそれを保存するということを、はばかった点もあるのじゃないかなと思ってみたり(笑)。しかし、アメリカはアーカイヴズを大事にする国ですから……。

ハーディー家への資料探索

北垣　この問題はまだあきらめるには早いとぼくも思っております。と申しますのは、『全集』第十巻の解題にも書いておきましたけれども、ハーディー家の系図をつくってみますと、枝分かれが激しいわけです。いろんな

子孫がおります。そのうち、A・S・ハーディーの系統はもちろんゲルストン・ハーディー氏で、その息子のヒュー・ハーディー氏という建築家がニューヨークにいるのですけれど、何しろ、そのヒュー・ハーディーさんあたりになると、日本、新島、同志社といったことは聞いてはいるけれども、アルフィーアス・ハーディーの墓がどこにあるか、それは知らないのですから。実はヒュー・ハーディーさんを先祖の墓に連れていったのはぼくです(笑)。アメリカ人が日本人に連れられて墓参りしているのだから。

竹中　この夏、北垣先生や井上先生に教えられて墓へ行ってきましたよ。

北垣　井上先生がその墓を発見して下さったからぼくがそういうことをできたのですけれどもね。

ところで、井上先生もご存じのように、ボストンのマサチューセッツ・ヒストリカル・ソサエティーに、アルフィーアス・ハーディーの三十歳の時の旅日記が残っております。これは竹中先生に申し上げるの忘れておりましたけれども、ハーディーはスペイン、イタリア、エジプト等を仲間と一緒に旅したことがあるのです。それはまだ新婚時代ですから、日記を書くけれども、その日記は奥さんあての日記なのです。帰ったら決算書みたいに奥さんにサッと出して読んでもらって、「俺、何も悪いことしてこなかった」、そういうような日記とおぼしきしろものですね。二冊本でした。それをマサチューセッツ歴史協会に寄贈したのはだれであったかというと、やっぱりハーディー家の子孫の一人で、チャールズ・A・プラット夫人なのです。それはA・S・ハーディーの系統ではないほうですね。したがって、そういう先祖の非常に興味深い日記をもらっていたということは、ハーディー夫人からかわいがられていた子孫のうちだれかが、「これはおじいさんの日記なのだ。おまえに……。」というふうにして、ミセス・ハーディーはアルフィーアスが亡くなってからかなり遺品を整理してきたように思いますね。だから、系図を手掛りにして調べていけば、あるいは当たるかもしれないと思っています。

柏木義円の「故新島襄先生を憶ふ」

河野　それと直接関係がないのですが、さっき竹中先生が徳富蘇峰が新島についていろいろ書いたり講演をやったりしていて、それが非常に大きかったと。確かにそうなんで、その徳富の新島に対する考え方というのは『三大人物史』に集約されていると見ていいと思いますね。

その徳富も含めて、と申し上げてよろしいでしょうが、同志社関係者が新島に対して関心をもつ、あるいは伝記的な事実を調べようとかそういった契機になりますのは、新島の永眠記念日ですね。歴史的に……。一周忌だとか、二十年記念だとか。その記念日には、規模はさまざまですけれども、同志社のOB、それから学生生徒が祈禱会とか記念集会をやるわけですね。そこでは直接、新島の教えを受けたさまざまな人たちから新島についての思い出が語られる。さらに、その中のあるものは文章にして、『同志社文学』とか、『同志社時報』といった機関誌に掲載されるわけです。これが新島を研究し、かつ新島に対する関心を強めていくことで果たした役割は大きかったと思います。

それから柏木義円、この人は明治三十年に同志社を去って安中教会を牧しますが、彼は主

宰する『上毛教界月報』に、新島の永眠記念日になりますと、特集のようなものを組みまして、新島に関する寄稿を求めるとか、みずからもそれを書くということをやっているわけです。これも新島研究の上では無視することができない非常に大きなものだと思います。

井上　「故新島襄先生を憶ふ」というようなエッセイを載せておりますね。本当に涙が出るほど心酔している、そういう感じを受けますね。

河野　だから、そういう柏木をよく知っているものですから、蘇峰は柏木に新島伝の執筆を勧めたんですね。自分には新島先生の宗教的方面を書くにふさわしくないからと（柏木「新島先生人格の片鱗」）。しかし、その段階では柏木さんもだいぶん年が寄っていて、その気になってたらしいのですけど、ついに書かずじまいになるわけです。これは惜しいなという気がします。

そのほかでは、山室軍平、波多野培根、それから堀貞一などが新島について語ったり書いたりします。他にもいろいろいますが、それらは大体、新島永眠記念日のためのもの、あるいはそれを契機とするものだと言ってよろしいでしょう。

森中章光先生の功績

井上　デイヴィス、あるいはA・S・ハーディーなどの伝記が中心となり、多くの新島に学んだ人たちが語ってきた新島を直接、新島に習わなかった同志社の生徒・学生諸君が読んできたわけでありますが、森中章光先生というのは明治四十年代始めに同志社に学んだ方であります。森中先生は九十五歳、まだかくしゃくとなさっていますが、やはり森中先生の生涯は新島の資料を集め、新島を研究し、そして新島をより多くの人々に理解してもらおうという努力をひたすらになさってきた人であろうと思います。森中先生の新島伝は、先生の非常に個性の出たものでございますし、また先生が草鞋掛けで全国を歩き回って新島の貴重な文献を集めてこられた、手紙を写された、そういったものが現在の我々の新島研究に、多かれ少なかれ貢献をしている部分がありますが、そういった森中先生の果たされた役割を少しお話いただいて、そしてあと現在と未来に問題を移していきたいと思っています。いかがでしょうか。

河野　確かにおっしゃるように、私はずっと新島研究の歴史を見て、少なくとも昭和十年代以降、森中章光先生が果たされた役割は大きいと思いますね。最初のお仕事は校友会による『同志社五十年史』編さんの助手でそれ以後、新島の資料収集で全国を歩くとか、それから伝記その他の執筆に専念なさるのですが、やはり大きいのは資料収集、そして、昭和十七年六月に出版された『新島先生書簡集』とそれにつけられた「新島先生年譜」ですね。昭和三十五年二月に『続新島先生書簡集』を出されますが、それに改訂増補されました「新島先生詳年譜」をつけておられる。その詳年譜はご承知のように単行本のかたちにされて、研究者たちに非常な便宜を提供してきたわけです。森中先生の場合は資料収集とともに、この書簡集と年譜の編さんだけで十分新島研究に名が残る方だと思います。

もう一つ先生の功績は、昭和二十九年の十一月に『新島研究』を創刊された。これは現在も続いているし、井上先生も北垣先生もその委員でいらっしゃるし、いろいろやってこ

られたわけですけども、『新島研究』をほとんど一人で編集発行してこられた。その点でも私は忘れることができない方だと思っています。

ただ、その森中先生を考えますときに、森中先生の研究、あるいは資料収集を支えたのはどこかというと、少なくとも昭和十年代までは、同志社校友会なのですね。校友会の理事会の協力があったからこそ森中先生はお仕事ができた。そういう側面があることも忘れたくないと思うのです。財団法人同志社のほうでは、恐らく関心はあっても財政的にも人的にもそういうことができなかった。その肩代わりを校友会がなさってきて、そして森中先生が十分な活動ができた。もちろん身を削るようなご苦心があったと思いますけれども、校友会がバックアップされたということが大きいと思いますね。

北垣　その場合、校友会のどなたが特に森中さんのスポンサーになり得たのでしょうか。若松さんですか。

河野　昭和十年代に限っていえば若松兎三郎会長ですが、歴代の校友会長がそうですね。石川芳次郎とか牧野虎次ですね。

北垣　戦後は大江直吉さんが専務理事のときに、私にデイヴィスの『新島襄の生涯』を百周年記念事業として翻訳してくれという委嘱を受けましたから、校友会にはそういう伝統があったわけですね。

河野　はい。さらに、学校法人同志社とタイアップしてですけれども、機関誌、現在は『同志社タイムズ』ですが、これに新島の永眠記念集会の模様とか、講演の概要などをその都度掲載してきたし、現在もそうです。これも新島研究にとってずいぶん大きな意味があることですね。

井上　私が同志社大学に入ったのは昭和二十九年でございますし、また新島研究を始めましたのは、昭和四十年代の中ごろですが、当初はやはり森中先生が編集されたもろもろの新島関係資料を用いるということが主でございました。いま、『全集』に上がっているようなものを直接見る機会は、きわめてわずかでした。私は今回、十年間の研究をまとめて、『新島襄　人と思想』というのを出そうといたしましたときに、せっかく『全集』が出ているわけですから、『全集』に出典を求めてということで照合をいたしましたら、かなり違うのですね。特に新島が片仮名で書いている部分が全部平仮名に直っているということやら、読者を意識してでしょうか、かなり読みやすくなっているということがございました。私は啓発的な意味も込めて、読みやすいということも必要でしょうけれども、原文中心主義であるということが今後の新島研究のためにもいいのではないかと思って、あえて読みにくさを心配しながら、『全集』からの引用をしたわけで、森中先生というのはやはり啓蒙家であったと思います。

河野　そういうふうに位置づけていいと思いますね。

現代アメリカ人の新島・同志社研究

井上　そうですね。

『新島研究』という雑誌をはじめ、いろんな書物を出して新島を啓蒙してこられた。これの評価というのはやっぱりしていかなくちゃいけないのではないだろうか。しかし、今後はそれを乗り越えていくことが必要であり、そしてそれを可能ならしめるものは今回の『全集』ではないかと思います。私はここ十年

ばかり、いろんなアメリカ人がPh.D.論文などで同志社を、あるいはアメリカン・ボードとの関係で、あるいはその中でもちろん中心に新島が上がってまいります。英語で論文を書いております。例えばボラーは*American Board and the Doshisha*を書いております。それから二、三年前には、ノートヘルファーが*American Samurai*というタイトルで、内容はL・L・ジェーンズが中心でございますが、その中で新島が出てまいりますし、そういうアメリカ人の目から見て、デイヴィスやラーネッドや、あるいはA・S・ハーディーとは違った現代のアメリカ人が、百十年前の同志社や、新島を我々日本人とは違った視点で理解し、分析し、評価しているという、私はおもしろいなと思っております。

例えばボラーの論文を読んでみますと、だいたい明治十六年ごろまで、アメリカン・ボードへの同志社からの新島襄をはじめ宣教師たちの報告書の中には、「同志社」という名前は出てこない。あくまでトレーニング・スクール（伝道師養成学校）であり、京都トレーニング・スクールであって、同志社という名称は使われない。

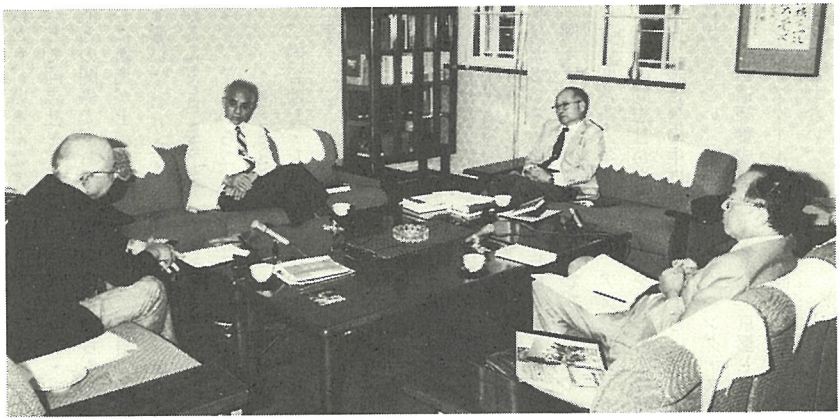
河野　京都ホームとかね。

井上　ボラーは同志社が出てくるのはやっと十六年からだと言っているわけですね。ですから、そういったところに新島の苦悩が読めるわけですが、そういうアメリカン・ボードを中心にしたアメリカ側の資料を同志社や、新島を研究する私たちはもっとを読みこなして、今後の我々の研究の中に生かしていく必要があるのじゃないかと思います。北垣先生あるいは竹中先生、アメリカに行っておられて特にそういう関係の論文をお読みになって、何か新しい、我々日本人が気がつかなかったような点を幾つか発見なさっているのじゃないでしょうか。

ハーヴァード大学のワイドナー図書館での調査

北垣　私は、昨年の夏まで五夏連続でハーヴァード大学で夏休みを過ごさせていただいたのですが、特に竹中先生のご紹介で、ハーヴァードの世界宗教研究所の一室に入れていただいて、大変よくしていただきました。それで、私の専門は十七世紀の英文学なものですから、そっちを勉強するのが主なんですが、新島先生に悪いですけど、従として、新島襄の研究ということを掲げて行っておりました。ついでに申しますと、十七世紀の英語を読んでいますとすぐ眠くなるので、眠気をさますためには新島の研究をするというのが私の方法で、いまだにそれが直らないのですけれども、でも新島先生について調べはじめると目がさめるのです。これは不思議なことです。それにハーヴァードの図書館というのは、そういったことを調べるには宝庫のようなものでして、まだまだあそこにいて時間を費やせるなら相当なことが調べられるだろうと思っております。

例えば、新島襄の出ましたフィリップス・アカデミーですが、ワイドナー図書館には新島が勉強したころの資料がちゃんと残っております。それを書棚から取り出してきて見ることができます。もちろんどういう科目はどの先生が担当していたかということもわかりますし、それからまた、クラシカル・デパートメント（古典学科）とイングリッシュ・デパートメント（英語学科）という二つがあったということもわかります。新島はもちろんイングリッシュ・デパートメントに属していまし



た。それから全生徒の名前がわかります。そして全生徒それぞれがどの寄宿舎にいるか、あるいは、寄宿舎にいない人はどこに下宿しているかということも全部わかるわけですね。一八六五年のところを見ますと、まだ新島襄の名前は出てこないわけです。六六年のカタログにはちゃんと出ています。そしてハーヴァードにはフィリップス・アカデミーの歴史を扱っている本も幾つかございまして、そのうちのフィーズという人の書いたものなどはとってもおもしろいものです。アーモスト大学出身の英文学の先生で、歴史に興味があって、アーモスト大学の歴史を書き、フィリップス・アカデミーの歴史を書いた人です。フィリップス・アカデミーの歴史には、もちろん新島襄のことも出てきますし、それから、新島邸を寄贈することになるM・シアーズのことも出てくるわけですね。シアーズが何者であったかということもたいへんおもしろいことですし、実は井上先生のご研究でも明らかなように、シアーズの後見人がアルフィーアス・ハーディーであったわけで、そしてシアーズはボストンでまだ成年に達しないときに、莫大な財産の相続人だったのですね。その人と同じくハーディーの被後見人であったのが新島なので、このことだけでも実におもしろい事実だと思いますね。

竹中　いま、シアーズ・ローバックという大きな百貨店がありますが、あれは全然関係ないですか。

北垣　全く関係はありません。それで、ボストンのシアーズ・ビルディングの所在もわかりましたが、いまはないのですね。いまボストンのその場所、つまりオールド・ステート・ハウスの向かいに四十階ぐらいのでかいボストン・カンパニー・ビルディングが建っています。新島の友人であるシアーズはイェール大学を出ているのです。彼は不動産業、銀行、鉄道の仕事に従事しておりまして、いろんなコレクションをしたり、イェール大学にはたくさんの寄付をしております。だから、よく思うことですが、新島の頭には、同志社が本当に困ったら自分はアメリカに行って、金を集めてみせると新島がしばしば息巻く背景には、シアーズのような人がいたということですね。新島が三度目の渡米をしてたら、同志社に一つか二つ建物が建っていたと思います。シアーズ館というのでしょう。歴史に

「もし」を投げかけてはいけないから、それ以上は言いませんけれども。その息子はハーヴァード大学の出身なのです。そして残念ながら、お父さんが亡くなって三年目の一九〇八年に事故で亡くなって、その墓も実は同じマウント・オーバン墓地の中にあるのです。そういったようなことだとか、アーモスト大学のことはもちろんアンドーヴァー神学校のことでも、ハーヴァードの図書館では幾らでも見ることができる。あるいはまた十年間、新島がニューイングランドに住んで、田中とのヨーロッパ周りの時期をも含めてのことですけれども、その頃どういう出来事が起こったか、あるいは例えば、ピーター・パーカーというラットランドの集会で最初の千ドルを寄付した人が、なぜ新島に千ドルを寄付する動機をもったかというようなことを調べるのには、本当にハーヴァード大学はもってこいだと思います。まだまだ克明に見ていけば、そして『全集』の第七巻が出れば、さらにアメリカとヨーロッパでの新島のことを調べる手がかりができると思います。実は、新島がマッシュー・アーノルドに会っているということを実証するのは第七巻なのです。

アメリカ時代の新島研究の必要性

河野　いまの北垣先生のお話を聞いて思うのですけれども、アメリカ時代の新島について書かれたものは非常に少ないですね。ご承知のとおり日本人の手になる伝記でもアメリカ時代の新島がやっぱり手薄なんです。

私、新島の四十七年の生涯を三つに分けて考えたらいいのじゃないかと。第一期は一八六四年、元治元年の六月に函館から二十一歳で脱国するまで。

第二期は脱国から一八七四年、明治七年の十一月に新島が横浜へ帰り着くまで、約十年間ですけど、これは二十一歳から三十一歳までです。この第二期というのは、いろんな意味において新島の生涯にとってものすごく大事な時期です。

第三期は帰国しましてから一八九〇年の一月二十三日に亡くなるまで、これはいわば事業の時代ですね。この三期のうち調査研究がいちばん手薄なのが第二期、つまりアメリカ時代なんです。北垣先生にも井上先生にも、その時期に関するいいお仕事があるわけですが、これからはここをもっと精力的にやらないかんのじゃないかと思います。

フィリップス・アカデミーの新島

井上　ありがとうございます。

竹中　フィリップス・アカデミーにぼくはこの夏行ってみたら、新島が洗礼を受けた昔バートレット・チャペルといわれ現在はピアソン・ホールと呼んでいる建物をみました。その北隣りに、サムエル・フィリップス・ホールという一九二四年に建てられた建物があります。これは、キャンパスの中心となっている立派な建物です。その中の教室に入ってみますと、歴史のクラスには新島の写真がちゃんとかけてありました。

ですから新島の写真を置いてあるのは必ずしもアーモストだけではないと。フィリップス・アカデミーも新島の写真を置き、そしてその横に東洋の地図をかけている。「これは何の教室ですか」ときくと「これは歴史の教室です」と。世界史などをやるところでは新島の写真を毎日見ながらね。日常生活の中に新島が入っているように思いました。それから、

フィリップス・アカデミーのカタログの終りのほうにワイルド・ローヴァー号の写真があり、新島襄についての記事が印刷されています。

この写真が入ってますよ。これの原画について、北垣先生はご存じじゃないですか。

北垣　これはケープ・コッドのチャタムにありますよ。

竹中　セイラムの博物館で写真を見ましたが原画はチャタムにあるのですか。

北垣　チャタムの歴史協会にあります。

竹中　この原画は中国人がかいた絵のようですね。

北垣　私たちの今いるこの部屋（有終館）まで来たことがあるのですよ。

竹中　この絵が。そうですか。

井上　九十周年のときに借り出したのです。

北垣　ここに飾られていた。

河野　複製はございますけどね。

竹中　その写真がそのフィリップス・アカデミーのカタログに出てますね。

河野　出てますね。そして新島の紹介記事が出ている。

竹中　紹介記事が書いてあって、ちゃんと七五三太がなぜ襄に変わったかというようなことが記されています。

北垣　そしてそのアドミッション・オフィスの名前がハーディー・ハウスです。

竹中　ハーディー・ハウスの由来をきいたところそこにいた御婦人は、「知らない」ということでした。しかし、あとでフィリップス・アカデミーの記録を読んでいたら、一八〇五年にあの建物はアカデミーの所有となり、校長宅として用いられ、理事長をつとめたアルフィーアス・ハーディーを記念してハーディー・ハウスといわれて、入学事務室として用いられていることがわかりました。

河野　私もアドミッション、ハウスへ行って、同じようなことを訊ねたら、「これはアルフィーアス・ハーディーが理事会などに来たときに泊まるとこになっていたというふうにおっしゃいました。

竹中　それからフィリップス・アカデミーの、校章ですね、同志社だったら三つのクローバーのあれですけども、ポール・リヴィアのかいた、まああの人は銀細工師でしょう、だから凝ったものを作りました。沢山の花が咲いていて蜜があって、それにハチがたかって、だから、「勤めいそしめ」というか、勤勉というようなことを思わせる。そして、大陽の部分にNON SIBIと書いてあるのですね。「あなた自身のためではなく」（not for yourself）と記されています。恐らく新島は食堂に行っても、この校章の入ったナプキンを使っていたし、ライブラリーに行けばそれが本に押してあるし、校長の手紙にはそのシールがちゃんとあるレターヘッドで、毎日毎日勤めいそしんでナンシビ、「汝のためにではなく」という、教育をうけたのではないかと思います。勤勉に神の栄光のために働け、という精神が新島の北米滞在中の日常生活の中に、どこに行ってもそういうものに触れたのじゃないかなと、そういう感じがしますね。

最近の新島研究

井上　ここ最近、一、二年の間にいろんな方の新島伝、あるいは新島研究論文が出てまいりました。一つは本学の卒業生である、そして現在、朝日新聞社にお勤めでございます吉田曠二さんの『新島襄　自由への戦略』と

いうのが昨年の十二月に出ておりますし、ことしの三月には、長年、新島研究に携わってこられた杉井六郎先生が退職をなさいます、その記念論文集、『近代日本社会とキリスト教』の中に、今日、ご出席の先生方もお書きでございますが、新島研究のいちばん新しい論文数点が載っております。それからまた、法学部の伊藤彌彦先生がここ二、三年、新島に関心をおもちでございまして、例えば二年ほど前に「新島襄の脱櫪」というような論文や先ほどの杉井先生の記念論文集にも、「新島襄の函館時代」というのを書かれています。これはまた我々とは違った新しい視点でおもしろいと思うのですが、現在の新島研究というようなことで先生方にご発言をいただければと思うのですが、いかかでございましょう。

河野　私はいま新島の大学設立運動について書いているのですけれども、そのテーマももうとっくにやられているだろうと思ったけれども、森中先生の『新島先生と徳富蘇峰』以外、実証的というか、資料に基づいてきちんとそれをやるということは、いままであまりなかったようですね。新島は大学設立運動を非常に無理してやることで、命をちぢめたんだといわれてきたわりに、じゃ、具体的に募金運動というのはどのように展開されたのかという、そういう研究がなされてなかったのはなぜだろうというようなことを、考えさせられました。

新島研究の方法

北垣　ぼくはいま河野さんの疑問に対して二つの理由があると思います。一つは、これまで新島先生の資料は、神聖にして侵すべからずで、普通の人は見せてもらいにくい状況にあった。また保管をなさるほうでも非常に守りがかたくて、のこのこ出かけていって、「あれ見せてください」といえばすぐに見せてもらえる状況でなかったことが一つあると思います。ですから、『全集』を出すことによって、これが突破されたということは非常にありがたいことだと思っております。

まだそういう要素が若干残っておりますのは、新島旧邸に新島襄の書物が新島が生きていたころとほぼ同じ並べ方で置いてあるわけですね。これをあんなところに置いておく理由はぼくはないと思っております。代りに写真と、本の目録をあそこに置いておいたらいいと思うのです。新島がどういう本をどの程度読んだかということは、実際それを手に取って見ないと、どれくらい書き込みをしているのか、汚しているのかということが、新島の精神的成長をたどるにはどうしても必要なことなんですね。それが今は簡単にはできません。ですから新島の所蔵していた書物は新島の研究者が学内の特別閲覧室等で見られるようにならないと本格的な研究ができない面があると思います。

そして、もう一つは、新島研究をしてきた人々が必ずしも歴史研究の訓練を経ずにやってきたうらみがあると思うのですね。つまり、新島先生を崇拝するあまり、これもやっぱり神聖にして侵すべからずの面であるのですが、なお崇拝すべき新島像をつくり上げるようにだんだんもっていったということであって、もっと学問的な厳正さをもって、一つ一つの事実を比べ合わせ、分析し、明らかにうそであるということがわかったら、うそとして退けて、真実だけを積み上げていくという、そういう努力がもっとなされてくればよかったと考えます。恐らくもろもろの新島襄の伝

記を出版順に並べてみれば、ある事柄に関しては、だれかが与えた間違った情報がずっと最後まで糸を引いている面が必ず出てくるだろうと思うのです。ですから、繰り返しになりますけれども、『新島襄全集』が出たということは画期的なことです。から、これでいままでのそういう霧のような面を払拭していける筈です。新島旧邸の書物に関しても、もう少し研究者に開放されないものかというふうに思います。

河野　新島旧邸の机、椅子と同じ性格をもったものという、管理者はそういう見方をしてきたわけですね。あそこにあるテーブル、椅子を持ち出すことはできないと同じように、あそこにある本はそこに備えつけのものだから、それは取り出してはいけないという考え方が少なくともいままであったと思うのです。いろんな方からご批判やご要望がありますので、今後の管理上の課題の一つになるでしょうね。

それから、確かに『全集』が出ればいろんな問題が解決されるだろうと、北垣先生のおっしゃるとおりだと思います。私は、新島に関する文献の調査を断続的にやってきましたが、新島について書かれたものは、伝記とか研究、随筆その他を含めて見ますと、執筆者は同志社関係者だけではない、全国的な広がりをもっているのですね。ということは、日本近代の先駆者の一人としての新島に対する関心というのは、相当高いとみていい。ただ、新島を具体的に研究していくにも資料があまりにも乏しかったという問題があった。これは致命的だったという気がしますね。『全集』によってその問題がようやく解決されようとしているわけです。

今後の研究ということで申しますと、新島の場合には著作がありません。*Life and Letters*はありますけれども、彼自身の手になる自叙伝もない。つまり一冊ないし数冊の著書によって、集約的に自らを表わすということがありませんでした。彼は「大学設立の旨意」のように活字になったものから書簡、それから日記、その他宗教、説教、学術講演の草稿、それは全部今度『全集』に入るわけですけれども、それらのすべてに新島は自分の信仰であるとか教育観であるとか、人生観、世界観を断片的にちりばめたのです。だからそれら全体を見る必要があるといわねばならないでしょうね。

竹中　ぼくもそういう点は感じますね。いままでの新島研究、新島に直接教えを受けた人か、あるいは新島の書簡とかそういうある程度かいま見ることのできる資料から新島を見ていたけど、今度は十巻という『全集』が公刊されます。そしたら、その広がりで新島の全体像をつかむ研究が期待される。先ほどお話のあった杉井先生の『記念論文集』なんかに出ている論文の中には、『新島全集』を使ったものがかなりありますね。それから、法学部の伊藤さんの「新島襄の脱櫪」ですか、これも非常に興味深い論文で、資料的にも『全集』を駆使されています。また*My younger Days*ですか、あれは児玉さんの訳ですか。

新島襄の総合研究の必要性

河野　そうです。女子大の児玉実英先生ね。

竹中　特に『全集』がなければ、ぼくは伊藤さんの興味深い研究はなかっただろうと思います。伊藤さんの研究でぼくは非常におもしろいと思ったのは、幕末から明治にかけての特にそういう社会史的な、あるいは政治的

な背景を分析しながら、今度は新島をそこに位置づけ、いろんな資料を通して、いままでの旧来の桎梏を脱却する人間として、ある意味では古いものからの解放の人としての新島を位置づけていることです。だから、提供された資料を用いて、新しい新島像が総括的に検討されていくというような時代にきていると思いますね。新島という人は、あれかこれかで決めつけることのできないものを持っていたように思います。すべての人間もそういう点はあると思いますけど、特に新島は、自分でもそう言ってますね、「自由教育・自治教会、両者併行国家万歳」ですか、両者併行型なんですね。あれかこれかを、教会の自治、伝道、説教、聖書、それだけをとるのじゃなくて、教育をとっていく。国際的であると同時に、また非常に愛国者である。それをどっちかで位置づけようとしたら、新島先生自身の分裂が始まる。そういう点では多様な要素がある人です。日本的な詩情をもち、芸術的なものがあるかと思うと、石ころを集めて高山の植物、鉱物の研究をするという自然科学的関心をもっている。両面あった人じゃないですか。ですから新島研究には、総合研究をもってしなければならないと思います。

井上　いま先生がおっしゃいましたように、やはりこの『全集』の完結を待ってといいましょうか、それは近い将来でありますが、新島の総合研究が必要であると。教育の面から、宗教の面から、あらゆる角度から新島を立体的、総合的に追っていくということが必要であろうと思います。そこで、本学を見回しますと、例えば人文科学研究所がありますし、それからアメリカ研究所がありますし、社史資料編集室がありますが、東の慶応では福沢研究センターというのがございまして、その研究センターの規定を読んでみますと、こういうことになっております。

第一条、設置、慶応義塾大学に福沢研究センターを置く。第二条、目的、センターは福沢諭吉の思想、業績の研究並びにその普及に努めるとともに、あわせて慶応義塾の歴史及び塾員の活動、業績に関する調査、研究、並びに資料の収集活動を行うことを目的とする。第三条、事業、センターは前条の目的を達成するため、次の事業を行う。一、紀要等の刊行、二、保管資料等の公開、三、公開講演、セミナー等の開催、四、その他センターの目的を達成するために適当と認められる事業。

こういう立派な規約をもった研究センターをお持ちで、慶応の方々はもとより、福沢に関心のある全国の研究者がこの研究センターに集って、定期的に研究会を持ち、紀要を出してられるということを聞きますが、いよいよ私どもの同志社におきましても、その場所がどこであるのか、社史資料室になるのか、人文研になるのか、あるいは別途こういうセンターを設けるのかは検討の余地がございますが、新島の総合研究を行う場が、今後しっかりと位置づけられる必要があるのではないか。そういった観点で、特に社史資料室の責任をお持ちである河野先生、何かアイデアをお持ちでしょうか。

河野　さっき北垣先生がハーヴァードへ毎年夏、五年間にわたって出かけていかれて、そのときに、ご自身の主目的は十七世紀の英文学研究であったので、新島先生についての調査、研究は従であったとおっしゃいましたけれども、これは北垣先生にかぎらず、ほかの先生方みなそうではありませんか。竹中先生も井上先生も、そのほかいろいろ新島につ

いて研究をなさっている先生方もそうでしょう。そういうことがずっと今後も続くとすれば、『全集』が出ましても、私はそんなに画期的な研究、行きとどいた資料調査や収集はむずかしいんじゃないかと思うのです。人文研でいいのか、慶応の福沢研究センターのようなものを作るべきなのか、社史資料室でいいのか、とにかく、専門的な研究機関が必要でしょうね。そして、少なくとも一年間はそこで新島研究に専従していただくようになるといいですね。これはそんなに金のかかることじゃないと思うのです。ただし、そういうセンターから、新島研究、資料調査という目的で一年間なら一年間、ニューイングランドその他へだれかを派遣するとなると金が少しかかりますが、そういったセンターと研究費がほしいですね。

もう一つの問題は、いま新島の研究会ですけれども、あの研究会は同志社の外郭団体として維持・運営されていまして、それは、それでいいと思いますけども、同志社が正規の機関として位置づけた研究会もあっていいと思います。人文科学研究所にさまざまな研究プロジェクトがあって活動しているように、新島研究プロジェクトをもつことですね。

井上　本学の人文科学研究所では、例えば過去に山室軍平の総合研究であるとか、留岡幸助の研究というようなものを、いろんな専門分野の方々の結集のもとになされてきて、それの成果がまとめられていますが、最近まで人文研の所長をなさっていた竹中先生、そういう同志社の創立者新島の総合研究が本学のどういうところでなされるのがいちばん望ましいとお考えですか。

全同志社の新島研究機関の必要性

竹中　私はね、やっぱり同志社は大学だけではありませんから、全法人の同志社というところで新島研究の恒常的な機関を設定していくことがこの次の課題だと思いますね。大学の例えば人文科学研究所の研究部門の一つにするのでは不充分だと思います。しかし人文研のほうでは、これは何も意図的にしなかった理由を考えたわけじゃないのですけど、新島研究というのは総合的な全同志社でやるべき研究じゃないかと思います。同志社にはちゃんと社史資料室というものがあるから、やっぱりそれを発展した形でやるのがいいのじゃないかなと私は思ってきましたね。

井上　北垣先生。

北垣　新島研究ということで、いまの新島研究会がもっとメンバーをふやそうとして呼びかけても、案外反応がありません。そのことを不思議に思っているのです。ぼくは新島先生に関しては、同志社の内部にアンビバレントな雰囲気があるということを見抜くべきじゃないかという気がしますね。アンビバレントといま申しましたのは、新島先生といったら「それっ」という面がある。ことに校友会にそういう面があると思うのです。ところが、じゃ、本気かといったら、必ずしも本気でないわけですね。つまり結局、河野さんがいつかもおっしゃっておりましたけれども、新島先生を奉るくせに、じゃ、新島研究のために金を出してくださいと言ったら、だれも出さないという面があるということ。そういう面とともに、同志社人の一人一人を見た場合に、卒業していった人々の中に何人か、あちらこちらにポツポツと新島先生のことをまじめに勉強している人がいるということはよく知っているのですけれども、しかし、その

くせ、じゃ、学生時代どうなのか、あるいは教職員の間でどうだったかということになったら、新島先生の研究はあれはだれかに任せておいたらいいので、私の知ったことじゃないという、あるいはまた私のようなものがそんなことができるはずがないとか、そういうふうに背を向ける面があるということを感じるのです。うまく表現できませんけれども、そういう雰囲気を感じますね。ですから、どこが音頭をとるべきか、だれが中心になるべきかという問題があるけれど、立ちはだかっている問題はこの新島襄という大事な創立者が、実はデイヴィス、徳富、堀貞一、森中先生たちがつくり上げてこられたイメージがあまりにもいかめしいがゆえに近寄りがたいという、そういった面が邪魔しているところがあるような気がいたします。うまく言えませんけれども。

井上　私は同志社に学び、奉職している者として、最初、新島を理解したときの新島というのはやはり非常に神格化に近い新島でありましたが、新島先生も弱い面もあったし、病気に苦悩された、本当に同志社を投げ出そうとされた、そういう弱い面も持ってられた。しかしまた、強い面も持ってられた。パトスの人であり、本当に意思の人であった。私はそういう新島に魅せられて現在にきているわけですが、もっと学生諸君に人間新島を理解してほしいと思っているのです。そして今後、『全集』が完結して法人同志社のもとでの中・高・大の教職員が新島の研究をより積極的に行い、そしてそれが日常の我々の教育活動、中学・高校・大学で行われている教育活動に戻されていく、生かされていかねばなりません。私は二十一世紀が近づくにつれて、ますます私学の置かれている立場は厳しくなっていくと思いますが、やはり私学はその創立者の建学の理念を常に現代的に理解し、解釈をし直していかなくっちゃいけない。私は新島の生き方、思想は非常に現代的な意味があると思いますから、そういったことが多くの人々によって、自分のフィロソフィーとの兼ね合いで研究され、そしてそれが日常の教育実践の中に生かされていくような、そういう研究会、新島襄の総合研究が行われることを強く望みたいですね。

河野　さっき竹中先生、例えば社史資料室であれば全同志社的な利用もでき、それは可能だからそういうところがいいのじゃないかというお話しでしたけれども、私、例えばアメリカ研究所なんか、新島襄のアメリカ時代というのをおやりになることは一向差しつかえないし、ぜひプロジェクトを一つにしていただけたらというふうに思いますがね。

北垣　数年やってきたのです。

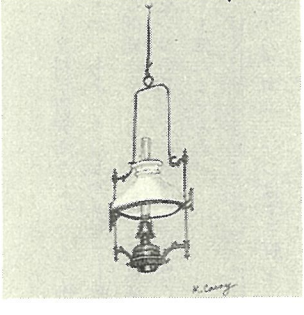
井上　宣教師研究の一環としてやってきました。

河野　人文科学研究所なんかでも、例えば排耶論とか、ああいう日本的キリスト教のさまざまな問題をやられるときに、新島襄とか同志社を一つのテーマにあげていただくことも可能かも知れませんね。

竹中　ぼくは研究を起こしていくには二つあると思うのですよ。一つはすそ野を広げるということです。つまり啓蒙活動を多くして関心をもつ人を広くしていくということと、それから一つはお金を集めるということですね。研究をするのには相当時間が必要ですね。時間とお金ですよ。それから、アメリカに行けと言えば、やっぱり百万ぐらいのお金を最低用意せんといかん。半年も行けば二百万かかる。そういう財力が必要ですね。それから、

雑誌を出していくのでもそうです。そしてその上で今度はどういう人がそこで一生懸命力を注いでやるか、チームづくりになりますわね。ぼくは『全集』が出たということは大変な力だと思います。……研究についてはこういう資料がある。研究のためのかなりの素材は整ったということが出来ます。さらにもう少し啓蒙的なものをやるべきじゃないだろうか。例えば中学・高校、大学などで用うるテキストになるものを作製することが大切です。中学や高校あたりでは数千人の生徒が毎年新島を勉強するわけですね。どういうテキストを使うか、まあ一つのテキストだけを強制することはできないかもしれませんが、いまの若い人たちが実証的な研究を背景にして、画像や写真を入れ新島についての詩歌や絵を取り入れて新島先生の生きざまをたどるような書物が望まれていると思います。十巻の『全集』があっても専門家を除くと学生や生徒には親しみが少ないと思います。また古くからあるものを見せても、それはちょっとわかりにくい。百周年のときに出した写真集でよいかというと説明が足らんということになります。「帯に短したすきに長し」のような感じがします。

それから、常時、日曜日までとは言わんけれども、しかし、日曜日なんか観光客がふえれば却って重要になると思いますが、京都にはやっぱり多くの内外の人がやって来ます。同志社はその中の一つのいい意味でも悪い意味でも名所です。同志社に来たならば新島のものにじかに触れられる、あるいは見ることができる、あるいはビデオを押せば新島の生涯が三十分で出てくるとか、そういう場所を恒常的につくるべきですね。同志社の今度の新島先生永眠百周年でもし何かするなら、その一つのプロジェクトとしてぜひ、名前はどういうふうにつけるかわかりませんが、新島記念館というものをつくってほしいと思います。そしてそれは常時行ってご覧くださいという体制ができて、その付属のところに社史資料室もあるというようなことが実現して欲しいと思います。これはいま委員会でとり上げられているかどうか知りませんが、ぜひ考えてほしいと思います。

井上　時間たっぷり、中身の濃いお話をしていただきましてありがとうございました。

（一九八九年九月七日収録、於有終館担当理事室）